



MIRA TUKU



持続可能な多世代共創社会
のデザイン
—公開用資料—



今回の調査のポイント

- 多世代交流と多世代共創の違いは？
 - 多世代である意味は？
- うまくいくものといかないものの差は？



事例調査

- ① 隠岐学習センター【島根／教育分野】
- ② 風と土の工芸【滋賀／交流移住分野】
- ③ 全国福祉理美容師養成協会【名古屋／福祉分野】
- ④ 和える【東京／伝統産業分野】
- ⑤ 京都市未来まちづくり100人委員会【京都／まちづくり分野】
- ⑥ オープンスペースれがーと【滋賀／福祉分野】
- ⑦ グローカル人材開発センター【京都／教育分野】
- ⑧ OCICA【宮城／伝統産業分野】
- ⑨ 多古新町ハウス【千葉／福祉分野】
- ⑩ 石巻日々新聞【宮城／まちづくり分野】



調査を通して見えたこと①

- ① 分断 → 交流 → 共創
- ② 世代毎の役割分担
- ③ 価値創造のタイプ



分断→交流→共創

- ・ 交流を通じてソーシャルキャピタルが形成され、その後、価値創造に移行することで社会価値、経済価値が生まれる
- ・ 親子、先輩後輩を超えた縦糸の関係性と編み目化
- ・ 交流自体が持つ社会価値と、価値創造によって生まれる社会価値、経済価値



価値の創造のタイプ

- ・ 一部がサービスの受け手として参画しているパターン（福祉関連）
- ・ 全員が取り組みの担い手として参画しているパターン（“まちづくり”関連）
- ・ 編集者が入り、価値を外部に出しているパターン（外部への販売、サービス提供）



世代毎の役割分担

- ・ 高齢者から子ども、若者へ「知恵と文化」が継承される
- ・ 子ども、若者から高齢者へ「効力感」が返される
- ・ 30-40代の運営者が場を維持する
- ・ 30-40代の運営者が価値への転換をはかる



調査から見えたこと②

多世代交流と多世代共創の違いは？

→交流はソーシャルキャピタルの創出、共創は社会価値と経済価値を生む取り組みへの転換

多世代である意味は？

→高齢者からの子ども、若者への知恵と文化の伝承とアップデート、親子を超えた立て糸の関係、価値提供の担い手としての30-40代

うまくいくものといかないものの差は？

→目的性（何を目指すのか）、基盤となるソーシャルキャピタルの構築、価値創造への転換、各世代の関わり方（受け手か担い手か）



多世代共創による地域づくり

- ① 文化、知恵の掘り起こし
- ② 可能性を感じて関わる外部者or外部とつながれる担い手が必要
- ③ まず関係性の構築、その後に価値創造への転換

